

縄文文化は木の文化

細田木材工業(株)

顧問 細田 安治

5月末報道各社による「木材や」にとって嬉しい記事を見つけた。ご存じの方も多いと存じますがご紹介します。

朝日新聞29日夕刊1面トップに世界文化遺産登録の見通しとして、空から見る縄文遺跡群の記事だ。「北海道・北東北縄文遺跡群」を構成する17の遺跡群が存在し1道4県(北海道×6、青森県×8、岩手県×1、秋田県×2)にまたがる広い範囲だ。なかでも特筆すべきは、青森市の三内丸山遺跡跡である。5900年前から4200年前までに営まれた大集落で、有名なのは6本柱の大型掘立柱建築物である。記事では現在修理中で仮設の覆い屋で隠されていると報じている。

◇天声人語

更に5月30日の天声人語には、縄文時代「石器時代」をより正確に知ろう。として「木器時代」と呼ぶべきとした歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリ氏が『サピエンス全史』でそう書いていた。木は石器や土器と違い有機物のため腐って分解されやすく、後世にはなかなか残らない。

しかし、人々の身の回りには木で作られたものが多かったに違いないと想像できる。青森県にある三内丸山遺跡からは幸運にも木製品が出土している。ゴミ捨て場だった谷に水分が多く、空気からさえぎられていたためらしい。

発掘調査に長く携わった岡田康博氏によると、木製の皿のような器には鮮やかな赤い漆が塗られていた。

厚さが僅か5ミリという精巧な木器もある。木の文化が縄文文化だったことを示しているという。

◇ここでの教訓

「木材や」としては嬉しい事だ。石器時代の竪穴住居生活では、雨風の侵入を防ぐため柱を立てた。チョット見には大きな「火の見やぐら」のようにも見える。

水分が多く空気がさえぎられていた。とあるが、これは「木材や」の水中貯木に相当する。

昔、平井町(現東陽5丁目)の宮内庁管轄皇室林野局貯木堀には、井桁に組んだ高級材を積み上げ、水中に沈め、腐れを防ぐ沈木として保管していた。そのほかにも広葉樹の高級材は、それ自体が比重が高く沈むので、浮き木を付けて保管した。そのほかにも昭和から平成にかけての、丸の内再開発時に解体されたビルの基礎にある松杭が引き抜かれた。ビルの基礎として使われた松杭は、使用時と全く品質が変わらず、地中で基礎杭として建物を支えてきた。私ごとで恐縮だが、千石の製材工場跡から引き抜いた松杭も、全く新材と同様の品質を保持していた。

木は使い方、保管の仕方で長持ちする。5900年前の縄文時代から品質を保持していたことが立証された。鉄筋コンクリートの杭がここまでもつだろうか。

更にこのほかにも、発掘された出土品の中に、厚さ5ミリの木の器に、赤い漆が塗られていた。とあ

るが、木は信じられないくらいの耐久力を持っていることが立証されている。正に縄文文化は木の文化だ。

◇文化遺産に登録される見通し

農耕はまだ始まっておらず、狩猟採集で食物を得ていたにも関わらず、定住生活を営んでいた。世界でも珍しい縄文文化がまた注目されそうだ。

◇遺構六本柱建物群

現在まで三内丸山遺跡で検出された遺構の中で、最も重要視されているものである。その柱の大きさを評価されることも多いが、それと共に注目すべきは、柱穴の間隔、幅、深さがそれぞれ4.2メートル、2メートル、2メートルで全て統一されていることである。これはその当時既に測量の技術が存在していたことを示すものであり、ここに住んでいた人々が当時としては高度な技術を持っていたことを示すものである。特に4.2メートルというのは35センチメートルの倍数であり、35センチメートルの単位は他の遺跡でも確認されているので、「縄文尺」とも言うべき長さの単位が広範囲にわたって共通規格として共有されていた可能性が考えられる。



六本柱建物群

◇ここでの物好き、縄文尺は鯨尺の元祖か

ここで筆者の物好き癖がでたがご寛容のほどを、

現代日本の生活では、長さを表す単位はセンチやミリなどのメートル法を用いるのが一般的だ。しかし、曲尺(かねじゃく)を使用する大工さんや、鯨尺(くじらじゃく)を使用する呉服屋さんなどでは、現在でも「尺」の単位を使用している。

◇そこで

尺は、尺貫法とよばれる長さの単位で、地域や時代、測るものなどによってその長さはまちまち。日本においても、さまざまな長さの尺が使われていたが、明治時代に入り、尺(曲尺)の長さを1mの33分の10と定め現在に至っており、鯨尺はその1.25倍となっている。(ネット参照)

縄文時代には裁縫の技術が発達し縫い針などが出土されているとされる。裁縫で気が付いたのは鯨尺だ。鯨尺の寸法は1寸が1寸2分5厘と2割5分多くなっている。縄文尺は350mmが1単位となり、12倍が4200mm(13尺.86)となる。細かい計算なしで縄文式に伸び(つまりおまけ)がついていたと考えれば、裁縫の技術が発達していた縄文時代、縄文尺と呉服屋さんの鯨尺はつまりセームセームと考えましょう。

◇建設技術の集落の団結力

さらに、これほど大規模な建造物を建てるには多くの労働力を必要としたはずであり、集落居住者の団結力と彼らを的確に指導できる指導者がいたことも推測できる。また、柱本体にも腐食を防ぐため周囲を焦がすという技術が施されており、長い間腐食を防ぐことのできた一因となっている。関西地方に残る焼き板工法の元祖であろう。柱は2度ほど内側に傾けて立てられていた。現代の内転(うちころび)と同じ技法である。

◇復元建物について

六本柱建物跡の復元に当たっては様々な意見が出された。建設する場所は六本柱建物があったと推測される場所のすぐ脇に決まったものの、ただ柱が立っただけなのではないかという意見や、逆に装飾具などもある非常に凝ったものだったのではないかという意見も出された。

考証と施工は小山修三の監修の下、大林組のプロジェクトチームが行った。結局、中間を取って屋根のない3層構造の建物になった。しかし床があるのに屋根がない、もしくは床がないのに屋根があるというのは中途半端な感が否めず、後々までこれでよかったのかと疑問の声が上がる要因となっている。なお、普段はここに登ることはできない。

◇大型竪穴式住居の内部は

三内丸山では幅10メートル以上の大型竪穴式住居跡がいくつも出土している。その中でも最大なものには長さ32メートル、幅10メートルのもので、これが復元されている。内部の見学も可能である。

◇竪穴式住居跡

三内丸山遺跡では、一般の住民が暮らしていたと思われる竪穴式住居跡も多数発掘されている。屋根に関しては茅葺き、樹皮葺き、土葺きの3種類の屋根を持った住居をそれぞれ想定・復元した。これも内部見学が可能である。



大型竪穴式住居内部跡



茅葺屋根住居